



平成27年度 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室 “S-チル”

年次報告書

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいで活動しています。



東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室 “S-チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
TEL&FAX : 022-795-3263
E-MAIL : s.children@sed.tohoku.ac.jp



平成27年度 年次報告書

目次

■ 概 要・スタッフ	01
■ 活動内容	
1. 相談実績	03
2. 里親サロン	04
3. 学習支援	05
4. 調査	06
5. 震災子ども支援室主催による会議、シンポジウム、研修会・座談会	07
6. 研修講師の派遣	09
7. 会議、情報交換会出席	09
8. 関連自治体・団体への訪問	09
9. 講演会、研修会等出席、相談員研修(スーパーヴィジョン)	10
10. 支援室来室対応、情報交換	10
11. 報道関係、来室対応	10
12. 広報・出版物・報告書・執筆	11

平成27年度 「震災子ども支援室」活動報告

● 概要

震災から5年目の年となった今年度は、前年度からの事業継続に加え、活動の幅が一段と広がったことが実感できる1年となった。以下、新たな取り組みの概要をご報告する。

第一に、震災遺児、孤児の子どもたちを対象とした学習支援事業（通称“しゅくだい塾”）を行った。東北大学教育学部および大学院教育学研究科の学生が出向き、子どもたちが不得意で教えてもらいたいと思っている学習内容に合わせて、1対1の個別学習を行うものである。今年度は、夏休み（8月3日～5日）と冬休み（12月5日、6日）の時期、あしなが育英会のご協力をいただき、石巻レインボーハウスをお借りして実施した。“S-チル”が長い間願っていた子どもたちへの直接支援が、関係各位のご尽力を頂いてようやくかたちとなったと言える。当日は、小学生から高校生までの参加者が集まり、お兄さんお姉さん（本学部・本研究科の大学生）の助けを借りながら、普段は遠ざけがちな勉強に果敢に取り組んだ。苦手なことが“わかる”“できる”体験、じっくり自分のペースで取り組む体験の中で、子どもたちは長時間の学習をものともせず、合間のリクリエーションを含めまるごと楽しんでくれた。保護者の方々からも、「帰ってきて一番に（教えてもらった）勉強の話をしてくれた。そんなことははじめてで、びっくり!」「私ではどうやって教えればいかわからなかったので有難かった」などの感想を頂戴している。この取り組みは、今後も開催日程や場所を考慮しながら継続していきたい。

第二は、みちのく未来基金にご協力いただき、現在、大学生や専門学校生として学ぶ震災遺児、孤児（みちのく生）の方々に行った座談会である。“S-チル”の方針や姿勢を振り返るため、当事者視点の意見や考えをお聞きすることが目的であった。3月と9月の2回のミーティングでは、「支援とは何か」ということを根本から考える契機となるコメントを多数いただいた。それらをまとめたものは、参加者の許可を得て、宮城県臨床心理士会研修会、日本災害看護学会教育講演において紹介し、広く支援者の姿勢再考のための提言として共有することができた。このミーティングも継続して開催することを考えている。

第三は、東部保健福祉事務所との連携による遺児家庭調査の実施である。これは、遺児家庭の現状の把握とともに、現行の遺児家庭サロンをより利用しやすいものとするための情報収集を目指したものである。その結果、世帯収入の減少、自立前の子どもの養育、身近なサポートの低さは、養育者の具体的な困りごとや不安、自身の精神的健康に関連していることが示された。また、男親はサロンへの参加がみられていないが、調査結果からは、男親と女親では、困りごとや精神的健康において統計的な差はみられていない。このことについて、今後は、男親対象のサロン開催も考慮していく必要があるという東部保健福祉事務所の意向もうかがっている。調査結果は報告書にまとめ、関連機関に配布し、調査にご協力いただいた遺児家庭には簡易版パンフレットを別途作成して配布した。

第四として、“S-チル”の周知広報についても報告を加えておく。これまで、“S-チル”のチラシは、宮城県では学校を通じて生徒全数配布を行ってきたが、他県については各所代表への配布に留まっていた。これに対して今年度は、岩手県においても全数配布が可能となった。配布するチラシも全面的に見直し、震

災から時間がたつ中で寄せられている相談の例を一部お伝えするような内容に改訂した。なお、次年度は、高校卒業生用のチラシの改訂も予定しているため、先述のみちのく生によるミーティングの場を借り、当事者のアイデアを盛り込んでいきたい。チラシ配布により電話相談件数が増加することはこれまでも確認されている。“S-チル”がより多くの方々にとって使いやすいものとなるよう努力していきたい。

このように、今年度、活動の幅が広がることができた背景には、関係各位のご理解とご協力がある。そしてその土台に、“S-チル”の活動をに支えて下さっている寄附者の方々のご存在がある。皆様にはあらためて心より感謝申し上げたい。

支援活動の成果は、必ずしも即時に見えるかたちになるとは限らない。それゆえ、長期的な支援方針と地道な日々の活動をつなぐものとして、定期的な活動評価と目標の微調整を続けること、その動向を皆さまに定期的にお伝えすることが重要であることを実感している。本報告書による一年間のまとめをお読みいただいた皆様にも、忌憚のないご意見とご要望をお寄せいただければ幸いである。

震災から時間がたち、子どもたちは成長し、保護者のニーズも変容している。一方で変わらないところの重さも片隅に存在する。変わっていくものは見えやすいが、変わらないものは時間とともに見えにくくなっていくかもしれない。“S-チル”は、今後も常に自身を謙虚に振り返り、その時その時に必要な支援内容の検討を続けながら、活動を継続していきたいと考えている。

4月には熊本において大地震が起こり、現在もその余震に脅かされる多くの方々がいらっしゃる。この場をお借りして、心よりお見舞い申し上げます。東日本大震災後の東北は全国から長期にわたり多大なご支援をいただいた。彼の地に向けて出来ることについて、関係各位と調整し準備を進める一方で、震災後5年が経過した此の地の防災を見直し、あらためて3.11の教えと約束を心に刻みたいと思う。（加藤 道代）

平成28年5月2日

● スタッフ

室長：加藤 道代（教育学研究科人間発達臨床科学講座 教授 臨床心理士）

相談員：平井 美弥（臨床心理士・臨床発達心理士）

相談員：押野 晶子（保健師・看護師）

相談員：大堀 和子（社会福祉士）



平成23年3月20日 石巻市中瀬公園



平成27年2月25日 石巻市中瀬公園

1 相談実績

相談活動は、当事者相談をはじめとし、支援者支援、震災に関わる多岐の事柄に対して行った。

● 当事者相談

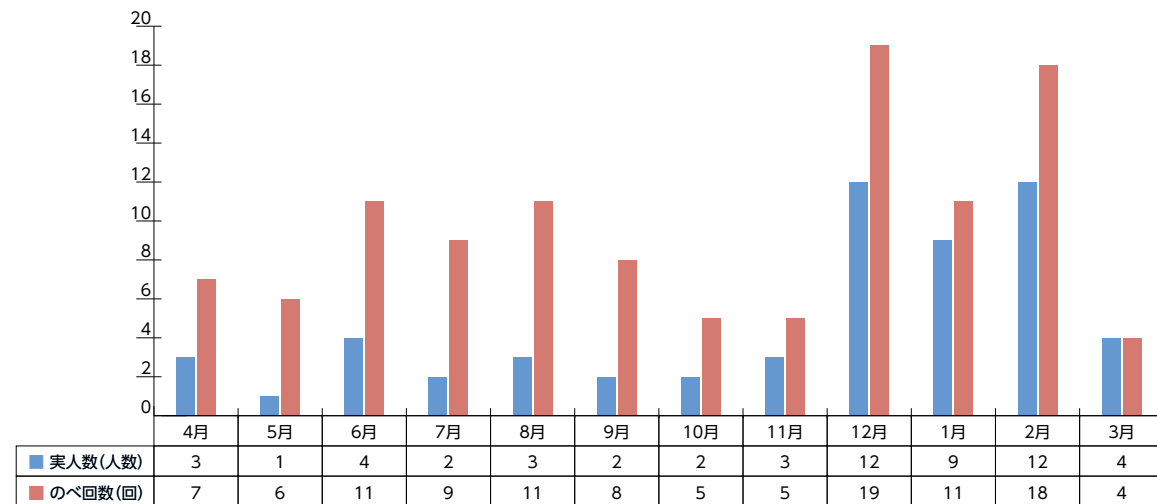
当事者相談は、子どもや保護者からの電話相談、面接相談（来所、訪問）を行っている。

	実数(人数)		延べ相談回数
	新規	継続	
電話相談	39	57	114
訪問、来所ケース	7	42	82
支援室内ケースカンファレンス	1	3	20

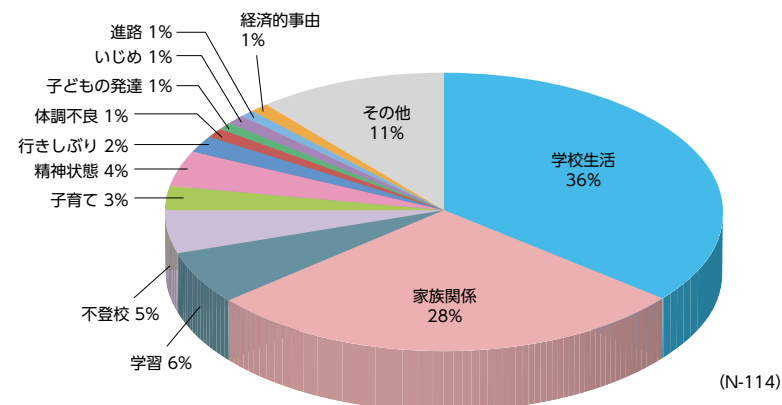
(平成27年4月1日～平成28年3月末日現在)

*平成26年度まで、ケースコーディネーション及び組織運営に関するアドバイスを計上していましたが、今年度は該当するものがなかったため、割愛しています。ケースコーディネーションとは、他機関からの相談を受けたり、ニーズに基づいて情報や機関を紹介している。組織運営に関するアドバイスとは、他機関への助言等である。

2015年度 電話相談件数



電話相談種別グラフ



● 様々な活動のサポート

他機関の事業への協力や、サポートを提供したい側と受ける側のニーズに合わせた情報の提供や橋渡しを行った。

1 南三陸町保健福祉課

南三陸町保健福祉課が主催し、震災後の子どもたちの心身の健康と健全な発達を支援していくための目的で、平成24年度から「南三陸町子ども支援連絡調整会議」運営実施への協力を行った。調整会議の実施によって、地域の各幼児・児童・生徒関連施設や、保健福祉課が情報交換し連携を深めた。

(平成27年8月18日)

2 宮城県東部保健福祉事務所

東部保健福祉事務所が主催の「震災遺児ひとり親家庭子育て交流会」へファシリテーターとして協力、参加した。交流会は今年度で3年目を迎え、初めての取り組みとして男性だけのサロンを開催した。

(平成27年6月3日、平成28年3月6日)

3 公益財団法人 徳島森林づくり推進機構

H25年度から、徳島県科学技術高等学校の生徒さんが製作された遊具を、昨年度の巨理町に引き続き、今年度は南三陸町の保育所へ寄贈するための橋渡し役として関わった。また、製作に携わった高校生が来県された際に、寄贈された遊具が、子ども達の発達にどのような影響を与えているかについての心理教育を講話した。

(平成27年12月11日)

4 公益財団法人 みちのく未来基金

みちのく未来基金スタッフに向けた研修を行った。

(平成27年8月21日)

2 里親サロン

平成24年から、宮城県東部児童相談所、東部児童相談所気仙沼支所、宮城県里親連合会との共催で、震災孤児を預かっている親族里親に対して、親族里親サロンを行っている。里親サロンは「安心してゆっくりとくつろいでお話しできる場所」を目指したものであり、そのなかでは子育てについての話など、同じ立場だからこそ分かち合える場所として利用されている。今年度は、受験生のお子さんをお預けされている方もおり、現在の受験制度についての戸惑い等についての話題もあった。また、石巻、気仙沼地域の里親さん合同の親睦会を3年間継続して行った。



	回数	日時	参加者	場所
石巻	1	2015/5/26(火)	5名	東部児童相談所
	2	2015/8/25(火)	1名	東部児童相談所
	3	2016/2/16(火)	6名	東部児童相談所
東松島	1	2015/7/14(火)	1名	東松島市コミュニティセンター
	2	2015/10/27(火)	2名	東松島市コミュニティセンター
気仙沼	1	2015/6/17(水)	3名	本吉町公民館
	2	2015/9/16(水)	3名	本吉町公民館
	3	2016/3/2(水)	2名	本吉町公民館
親睦会	1	2015/12/2(水)	17名	南三陸ホテル観洋

3 学習支援

夏休みしゅくだい塾

仮設住宅で生活する震災遺児・孤児への学習の場の提供及び、震災遺児・孤児に対する学習支援、ひとり親や親族里親に対するレスパイトや大学生スタッフとの交流を目的として、“夏休みしゅくだい塾”を行った。



開催日 2015年8月3日(月)～8月5日(水)

開催時間 13時～20時(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間含む)

開催場所 あしなが育英会石巻レインボーハウス

参加者 小学生7人、中学生12人、高校生4人(3日間延べ人数)

学生スタッフ 6名 **協力団体** あしなが育英会東北事務所、宮城県里親連合会



*しゅくだい塾では、毎朝始まりの会を行いその中で、アイスブレイク(ちょっとしたゲーム)や、帰りには終わりの会を行った。レクリエーションでは、誕生日チェーンや、人間知恵の輪、絵スチャー、呼吸法や筋膜ケア等を行った。

冬休み先取りべんきょう会

夏休みしゅくだい塾に引き続き、冬休み前の先取りべんきょう会を行った。

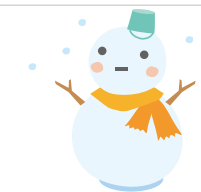
開催日 2015年12月5日(土)～12月6日(日)

開催時間 10時～18時30分(50分1コマ×3、レクリエーション、休憩時間含む)
12月5日:13:00～18:30
12月6日:10:00～15:00

開催場所 あしなが育英会石巻レインボーハウス

参加者 小学生6人、中学生3人、高校生3人(2日間延べ人数)

学生スタッフ 5名 **協力団体** あしなが育英会東北事務所、宮城県里親連合会



*べんきょう会では、毎朝始まりの会を行いその中で、アイスブレイク(ちょっとしたゲーム)や、帰りには終わりの会を行った。レクリエーションでは、ボールを渡しながら自己紹介、英語を使った遊び等を行った。

4 調査

宮城県東部保健福祉事務所の依頼を受け、東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家庭へのアンケート調査を行った。

本調査の目的は、第1は平成23年3月11日の東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育している震災遺児家庭の保護者を対象として、現在の子育て状況、生活状況に関する心配や困っていること、保護者自身の精神状態についての回答を得ることで、震災遺児家庭の現状を理解すること。第2の目的は、宮城県東部保健福祉事務所と東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル”(以下“S-チル”と表記)が連携して実施している“保護者交流会(ぽっかぽかサロン)”への関心や参加動機等を尋ねることにより、今後の支援活動を検討する資料を得ることであった。これらをまとめて、今後の事業や支援活動をより充実させることを目指して本調査を行った。

1 対象者

石巻市、東松島市、女川町の遺児家庭184世帯保護者

2 実施時期と回収数

平成27年6月24日(水)～7月15日(水)までの期間に各家庭に郵送法で送付した。配布数184通のうち、回収数は70通(回収率38.0%)であった。

3 倫理的配慮

アンケートに記述された個人情報は、宮城県東部保健福祉事務所が適切に管理し、“S-チル”は、個人情報をのぞいた回答部分のみを統計的に処理した。分析と結果のまとめについて、個人が特定されることはないことを紙面によって通知した。

なお、本調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会において実施の承認を受けた。(承認ID:15-1-002)

4 質問内容

<p>質問 1 フェイスシート情報(分析では*印を除く) 記入者の氏名*、年齢、子どもとの続柄、現在の住所*と居住形態、震災時の住所*と居住形態、電話番号*、被害の程度、震災前の就業状況、現在の就業状況、震災後の世帯収入、収入減の理由、家族構成と子どもの学年</p>	<p>質問 4 精神健康の程度(S-WHO-5-J:精神健康状態表簡易版) S-WHO-5-Jは、6件法である日本語版WHO-5-Jを4件法で評価する簡易版で、十分な信頼性と妥当性が確認されている(稲垣、井藤、佐久間、杉山、岡村、栗田、2013)。高齢者を対象として使用されることが多い尺度であるが、本調査では対象者の負担への配慮が重要であったためこの簡易尺度を採用した。</p>
<p>質問 2 子育てについて (1)子育てについての心配や困っていること(8項目) (2)子育てで困っていることについての相談相手 (3)相談する相手 (4)困っていることの詳細</p>	<p>質問 5 “保護者交流会(ぽっかぽかサロン)”について (1)関心 (2)参加希望 (3)どのような点が変わると参加できるか(自由記述) (4)希望頻度 (5)希望曜日 (6)要望</p>
<p>質問 3 生活について (1)生活についての心配や困っていること(6項目) (2)生活で困っていることについての相談相手 (3)相談する相手 (4)困っていることの詳細</p>	<p>質問 6 支援的介入への希望 (1)電話相談 (2)訪問相談 (3)遺児家庭向けのお知らせ</p>

上記の内容で調査を行った。

5 震災子ども支援室主催による会議、シンポジウム、研修会・座談会

1 シンポジウム「東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援」～それぞれの専門性を活かして～

東日本大震災から今日までの4年11ヶ月の間、震災で親を亡くされた子どもたちやその保護者の支援に携わっていた方々の報告をもとに、議論した。
(平成28年2月28日(日)、東北大学文科系総合棟11階大会議室、参加者数35名)



報告 1

学習支援の領域から

「創業20年の学習塾の経営資源を生かした震災遺児の無料学習支援事業」



株式会社セレクトィー
代表取締役
島山 明氏

小学校教諭の経験から、1人1人の良さを生かし丁寧にサポートしたい、1対1の授業をしたいと考え20年前に「個別教室のアップル、家庭教師のアップル」を立ち上げた。震災後はこれまでアップルで積み上げてきた受験の情報や学習支援のノウハウをいかし、震災遺児への無料学習支援をおこなっている。対面学習以外にもスカイプを活用し遠方の子どもたちの支援にも取り組んできた。学習支援を通して学んだことを活力とノウハウに活かしながら継続していきたい。

報告 3

法律の領域から

「震災で親権者を失った子どもたちに「未成年後見人」として関わっている「弁護士」からの報告」



弁護士法人青葉法律事務所
弁護士
花島 伸行氏

震災で親権者を亡くした子どもの未成年後見人として関わっている。親代わりとは言え、実際には一緒に住んでいるわけではないため、財産管理が中心になっている。子ども達が20歳になるまでに管理してきた財産をパソコンタッチした後も困ったときには相談に乗り、その子どもが自分で判断し、自分のやりたい人生を選んでいけるように育てて行って欲しい。そのために、子どもの身の回りの世話を実際に行っている方と、未成年後見人である自分が、どう協働して、子どもの成長・発達を支えていくのかということが、非常に大事なことだと考えている。

報告 2

歯科の領域から

「矯正歯科専門医は震災で親を亡くした子どもたちにどんな支援ができるのか」



伊藤矯正歯科クリニック
院長
伊藤 智恵氏

震災直後から診療を行う一方、避難所での支援活動を行った。全国の矯正歯科医の協力を得て、歯の清潔セットを避難所と自宅避難者へ3000セット配布、矯正歯科治療中断を余儀なくされた患者支援としてフリーダイヤルを設置、転院や治療費補助を含む治療継続をサポートし、それが日本臨床矯正歯科医会の震災遺児孤児矯正歯科治療補助事業へと発展した。今後も個人プロボノ活動を含め、対象者が抱える心理的・環境的問題を理解し共有しながら矯正歯科専門医として最大限のサポートをしたい。

2 みちのく生との座談会

公益財団法人みちのく未来基金から給付を受けている、現在大学生となった“みちのく生”*との座談会を行い話を伺った。お話の中からは、「現在地元から離れているが、今後どう地元と関わって言ったらよいか」などの地元への思いが強くだされていた。

(平成27年9月24日)

*みちのく生とは、公益財団法人みちのく未来基金の支援を受けて、大学等に進学している、震災遺児・孤児のことである。



6 研修講師の派遣

- 1 臨床心理士会「東日本大震災により親をなくした子ども達と里親について」
(平成27年6月13日:仙台市:講師・加藤道代)
- 2 日本災害看護学会教育講演「東日本大震災後の子どものこころとケア～これまでとこれから～」
(平成27年8月8,9日:仙台市:講師・加藤道代)
- 3 宮城県教育委員会東日本大震災心の復興事業「こころの復興フォーラム」
(平成27年8月11日:コーディネーター・加藤道代)
- 4 公益財団法人みちのく未来基金スタッフ研修
(平成27年8月21日:仙台市:講師・加藤道代)
- 5 宮城県司法書士会「震災孤児の里親の現状について」
(平成27年9月29日:仙台市:シンポジスト・平井美弥)
- 6 気仙沼市立面瀬中学校「思春期とストレス」
(平成27年10月29日:気仙沼市:講師・加藤道代)

- 7 徳島県立徳島科学技術高等学校
「災害後の子どものこころ」
(平成27年12月11日:仙台市:講師・加藤道代)



- 8 東北大学主催 東日本大震災被災地域へのサイコロジカルエイド 東日本大震災後の長期的支援の方向性
「震災遺児家庭における子育てと生活の現状について」
(平成28年3月5日:仙台市:シンポジスト・加藤道代)

7 会議、情報交換会出席

日程	内容	出席
平成27年8月18日	第5回南三陸町子ども支援連絡調整会議(南三陸町保健福祉課主催:南三陸町)	加藤・押野
平成27年11月13日	子どもの心のケア対策地域連絡会議(宮城県中央児童相談所主催)	大堀
平成28年1月21日	子どもの心のケア対策地域連絡会議(宮城県東部児童相談所主催)	平井

8 関連自治体・団体への訪問

日程	行先	日程	行先
平成27年 4月24日	亘理町立荒浜保育所	平成27年 12月25日	あしなが育英会 仙台レインボーハウス
4月28日	石巻・東部児相、東部保健福祉事務所	平成28年 2月2日	宮城県東部保健福祉事務所
7月3日	亘理町立荒浜保育所、吉田保育所、中央児童センター	3月20日	公益財団法人 みちのく未来基金第5期生のつどい
10月16日	宮城県教育庁	3月29日	気仙沼市役所 子ども家庭課
10月28日	あしなが育英会 仙台レインボーハウス	3月29日	あしなが育英会 陸前高田レインボーハウス
11月13日	名取市役所 子ども支援課	3月30日	宮城県東部児童相談所気仙沼支所

9 講演会、研修会等出席、相談員研修(スーパーヴィジョン)

日程	内容	出席
平成27年10月3日	シンポジウム「東日本大震災後の子どもの心理教育について考える」 (日本小児精神神経学会主催)	平井
平成27年10月16日、17日	学術総会特別企画「震災に現れた心身相関のインパクト」 (日本行動医学会主催)	押野
5月22日、9月18日、 11月20日、3月18日	スーパーヴィジョン 相談員研修(安井由紀氏:臨床心理士)	平井・押野・ 大堀
平成28年1月29日	東日本大震災における子どもの心のケアに関する報告会 (宮城県子ども総合センター主催)	平井
平成28年3月13日	東日本大震災から5年～こどもたちの健やかな成長のために～ (いわてこどもケアセンター主催)	大堀

10 支援室来室対応、情報交換

平成27年 4月22日	国際紙パルプ商事株式会社
5月7日	みちのく未来基金事務局
5月13日	あしなが育英会東北事務所
6月24日	あしなが育英会東北事務所・宮城県里親会
10月7日	チャンス・フォー・チルドレン
12月11日	宮城県子ども総合センター

11 報道関係、来室対応

平成27年 7月31日	共同通信社
平成28年 1月25日	NHK東北支局
2月3日	西日本新聞

12 広報・出版物・報告書・執筆

1 「未成年後見人制度・里親制度について」報告書



2 「東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家族へのアンケート実施報告書」



3 「東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家族の現状」東日本大震災による遺児家庭へのアンケート調査のまとめ(パンフレット)



4 シンポジウム報告書「東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援」～それぞれの専門性を活かして～(平成28年2月28日(日)実施)報告書作成と配布



5 平成27年度東日本大震災心の復興事業こころの復興フォーラム in みやぎ～子どもたちの未来のために～報告書P.7-22.

6 日本災害看護学会誌第17回年次大会講演集P.61

7 大震災に学ぶ社会科学 第6巻 復旧・復興へ向かう地域と学校 「寄付金による子ども支援活動の模索と展開: 東北大学大学院教育学研究科「震災子ども支援室“S-チル”」の3年間 P.211-228

8 FREEPAPER (ままぱれ宮城版)に掲載



9 東北大学オープンキャンパスに出展(平成27年7月29、30日)



10 “S-チル”ニュースレターの作成と配布



11 ホームページの刷新、フェイスブック更新

12 震災子ども支援室各チラシの刷新・配布



編集者

加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科教授
震災子ども支援室室長
平井 美弥 震災子ども支援室主任相談員
押野 晶子 震災子ども支援室相談員
大堀 和子 震災子ども支援室相談員

平成27年度
東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室“S-チル”
年次報告書

2016年6月1日

発行者 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
代表者 加藤 道代
住所 仙台市青葉区川内27-1
Tel/Fax 022-795-3263
E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp